解説

藤井光

アイシェ・パパトヤ・ブチャク（Ayşe Papatya Bucak）は、トルコ人の父親とアメリカ人の母親のもとイスタンブールに生まれ、アメリカ合衆国のペンシルベニア州フィラデルフィア郊外で育った。プリンストン大学を卒業後、アリゾナ州立大学で創作科修士号を取得し、現在はフロリダ・アトランティック大学の創作科で教鞭を執っている。文芸誌に出版された多数の短編からは、オー・ヘンリー賞入選作も生まれるなど注目され、二〇一九年に本作「いい風向き」を含む短編集『トロイア戦争博物館（*The Trojan War Museum*）』でデビューを飾った。

過去と未来に大きくまたがり、トロイア戦争をめぐる八つの博物館を語る表題作「トロイア戦争博物館」、あるいは、トルコによるアルメニア人の虐殺の生存者がアメリカ合衆国でみずからの経験を語って回るツアーに出ている「死者たち」など、ブチャクの作品は題材も設定も多岐にわたり、文体もその都度変幻自在に変わる。ただし、その背後には常に、作者みずからの生い立ちとも関連して、「トルコ」との距離感が主題として横たわっている。トルコ人としてのアイデンティティからは隔たっているが、それでもまったくトルコとは無関係でいられない、そのような「祖国」のおぼろげな存在を描き続けているのだ、とも言えるだろう。

本作「いい風向き」もまた、その主題を引き継ぐ形で展開されている。主人公グドルーン・タバックは、トルコ人の両親のもとアメリカで学位を得るが、兄を交通事故で失って以降、アメリカでの人生に目標を見出せず、かといってトルコに自分の居場所もないまま、四三歳のホテル労働者となっている。誰にとっても「ホーム」になり得ないという意味で、ホテルはグドルーンの状況を最もよく象徴する場所である。

さらに、舞台となるホテルを「出産旅行」の場とすることによって、属する場所がない、あるいは二つの属する場所が折り重なるというモチーフは重層的なものになっている。両親の国籍を問わず、合衆国内で生まれればアメリカ国籍が与えられるという「出生地主義」を利用して、このホテルでは経済的に余裕のある外国人たちが出産目的の長期滞在を行っている。そうして生まれてくる二重国籍の赤ん坊たちにとって、「母国」と「アメリカ」はどのような関係になるのか。グドルーンの境遇と、赤ん坊たちをめぐる騒動は、こうして重なり合ってくることになる。

そうした舞台で持ち上がる、謎めいたメモをめぐる騒動をミステリー仕立てで語り、物語自体も謎めいた警句をメモのように提示しつつ、「いい風向き」は主人公グドルーンが過去と現在との折り合いをどうつけていくのかを描いていく。兄の交通事故という出来事が生み出す余波は、グドルーンの内面に傷として抱え込まれ、そして兄の息子が登場することによって外面的なものとして現れもする。誰もが何らかの傷を抱えたまま生きていくなかで、また新たな世代が二重国籍の赤ん坊として生まれ、その赤ん坊たちもまた、みずからが何者なのか、という問いを一種の傷として抱えたまま生きていくことになるのだ。そうした「弱く、欠点だらけで、怯えた」人々に近づいては遠ざかる語り手の存在もまた、この短編小説にもう一つの奥行きを与えている。